

東京大学海洋研究所



ニュースレター

No.6 2001.3

●退官にあたって

研究裏ばなし

海洋生態系動態部門 浮遊生物学分野教授 川口 弘 一

<院生の頃>

1964年の4月に松江吉行先生の大学院生として、海洋研のプランクトン部門にやって来た。日本で初めての本格的な研究船淡青丸が出来、生物の方は1964年1月に初航海があり、相模湾で深さ700メートルまでのプランクトン採集が行われ、新しい生物が沢山獲れていて話題になっていた。中でも深海性の魚類とエビ類が目立った。松江先生は、視野の広い方で、この標本を見て「これは、やらなくてはいけません」と言われ、さっそく「深海性の魚類」が私のテーマとなった。松江先生は、「君はこの標本を阿部宗明先生のところへもって行って、名前をつけてもらい、その先の生態をやるんだよ。決して分類などやってはいけない。海洋研なんだから。」と言われた。そうこうするうちに阿部先生御自身が来られて標本を見てくださる機会があり、先生はひとあたり御覧になったあと「大変結構なものを見せていただきました。」と種名も告げられずに帰られた。今から考えるとその当時これらの魚に正確な名前がつけられる人など世界中どこにもいなかったのである。当時日本産魚類の同定のバイブルとして、松原先生の「魚類の形態と検索」があったが、代表的な深海魚のハダカイワシ類は32種しか載っていなかったし、そのうち半分の種は現在学名が変わってしまっている。我々は、現在日本近海に88種が生息していることを確認しており、今にして思えば、バイブルがバイブルとして通用するはずもなかったのだ。それでもとにかく生物量が多く、沢山獲れるのからやろうとヨコエ

ソの生活史をやり始め、この魚が性転換をやることを見つけて、プランクトン研究連絡会報の松江先生退官記念号に出したところ、深海魚研究の大御所N.B.Marshallの目にとまり国際会議で招待講演をさせられ、彼の魚の教科書にも図入りで紹介された。極東の隅の方で心細くやっていたこの馬の骨かも知れない私にとっては、大変な励みになった。年代は、旧き良き時代で、我々の先輩には古典的な分類学者、博物学者が沢山いて、のんびりとやっていた。深海魚に限っても英国のN.B.Marshall、デンマークのE.Bertelsen、ロシアのT.Ross、ドイツのA.Kothous、アメリカのC.Hubbs、E.Ahlstromなど皆親切でおおらかで大酒のみであった。彼らに育てられた連中が我々の世代で、丁度皆停年を迎えつつある。英国のN.Merrett、P.Herring、デンマークのJ.Nielsen、南アのH.Alexander、ロシアのN.Parin、アメリカのG.Moser、B.Nafpaktitis、R.Gibbs(故人)、オーストラリアのJ.Paxtonなどである。日本ではやっている人がいないので、どうしても外国とやりとりするしかなかった。なんだかんだとこのような暖かい雰囲気には支えられて、博士論文は、中・深層魚の地理分布をただ記載したに過ぎないものとなったが、なんとか書き終えることが出来た。そして分類が混乱していたので、それを出版することも出来ず、いらいら状態が続いた。

<漁業測定部門の頃>

漁業測定部門に就職してから、一大決心をして一番混

乱の激しかったハダカシワシ科ハダカイワシ属の混乱整理をし、漁測の清水さんと一緒に出版した。これが博士論文のようなものである。その頃国連の食糧農業機構のJ.Gullandから、世界の中層性深海魚の資源量推定をやってくれないかという話があった。とんでもない難問で「私はウソは申せません。」と答えたら、敵もさるもの、「小生アマのウソは信用しないが、プロのウソは信用する。」と憎いことを言ってきた。「さすが英国人の交渉は粋だ。」と変に感心して引き受けた。ノルウェーのが大西洋とインド洋の西半分、私がインド洋の東半分、太平洋と南大洋を引き受け、従来の生態学的知見の総括を行った。FAOに4ヶ月雇われ、1ヶ月ローマでレポート作りをした。タイピストと英語直しのW.Clarkがつきっきりで私との手書きレポートを一気に完成させた。とにかく1ヶ月間、朝から夕方まで書きつづけた。そのストレスや大変なもので、毎夜日本の政府機関からFAOに出向して来ている若い連中とローマの下町を飲み歩いた。

漁業測定部門の助手として就職していたので、部門の設立の趣旨からいっても深海魚を何時までも研究するわけにはいかないので、徐々に研究を喰える魚にシフトさせた。黒木先生のもとでバイオテレメリー用のトランスポンダーを魚に付けて泳がせ、音波情報で魚の遊泳軌跡を描かせる技法の開発をお手伝いし、トランジスタ回路集積が小さくならず苦勞した。青山先生の代になると資源解析部門では、漁獲データに基づく研究をやっている所以我々はそれ以外の手段で資源研究をやろうということになり、青山先生は、計量魚探、私は卵・稚仔法による資源研究を始めることとなった。青山先生と方針決定をした翌日、極地研の星合孝男先生から「たまには飲まないか。」とお誘いがあり、新宿で御一緒したところ極地研に来ないかとのことであった。あれが3日前だったらどうなっていたか分らない。私がお誘いを受けたところに院生時代海洋研でアザラシをやり、一緒にヨットなどを乗りまわして遊んでいた内藤靖彦君が行くことになり、現在大活躍をされているのは、御存知の通りである。私は、翌年文部省の金で、スコットランドのダンスタフナー・ジュ海洋研究所とオレゴン大学に行くことになっていたが、オレゴン大学をやめて卵・稚仔法の研究の進んでいるLaJollaの米国国立南西水産研究所に行きL.Lasker、J.Hunter等の研究を吸収し、漁測の院生だった山下洋、辻祥子君等に情報を流した。スコットランドには、ニシン仔魚の感覚器系の機能と生残り関連の実験生態学の大家J.Blaxterが居り、たまたま彼が我家の大家であったこともあり、いろいろ実験に関する情報を集めることが出来た。このような経緯で、魚の耳石日周輪の技法を日本で初めて漁業測定部門へ導入し、マイワシ、カタクチイワシ、イカナゴの耳石日周輪による仕事を始めることが出来た次第である。当時は、京大の田中克先生も長崎の西水研に居られ、マダイの日周輪を見るため、漁業測定部門に研修に来られ、昼休みのテニス、ソフトボールで大活躍された。

<バイオマス計画と南極越冬のこと>

根本先生が熱心に推進された南大洋生態系の国際共同研究バイオマス計画が始まり、冬の観測は基地での越冬により行うこととなった。内藤君との関係もあり、参加することとし、上司の青山先生に恐る恐るお伺いをたてたところ「国のプロジェクトだ。行って来い。」と言われ感激した。先生も酒飲みの私がああ厳しい身体検査を通ることはないと思っていたフシはあるが……。それでも肝臓、心臓はもとより、精神鑑定、性格テストにいたるまで何とか通り抜け合格してしまった。そして平澤威男隊長（前極地研所長）より、第25次越冬隊の生活主任を命じられ、以後越冬中もいたずらや悪いことが出来ずじまいになってしまった。行きに「しらせ」の処女航海に乗れる幸運に恵まれた。私は、旧淡青丸、旧白鳳丸の最後の航海に乗る幸運に恵まれていたが、処女航海は初めてであった。越冬生活に入り、南極に夜が戻ってくる頃、魚の仔魚を獲る目的でライト・トラップを海水下に入れたところ、仔魚も獲れたが、ナンキョクオキアミが沢山獲れ、手伝ってくれた隊員と踊り喰いで食べてしまい、翌日の基地の日刊紙アデリータイムスに大きく出た。しかしナンキョクオキアミは、冬になるともっと北の開水域へ移動するというのがそれまでの常識だったのでどうして氷下にこんなに沢山いるのか？ この疑問がきっかけとなり、「海水下におけるナンキョクオキアミの越冬戦略」という論文が生まれ、これによって今では、オキアミは海水下に積極的に移動し、アイスアルジーを食べるという風に常識が逆転してしまった。つまり南極の海水の張り出し具合とオキアミの生残に正の相関があるというのである。この研究にLaJollaの南西水研で机を並べハダカイワシの仔魚研究をしていたValLoebが関係していて、彼女はここ15年毎夏南極へ行って楽しんでいるというから世の中は狭い。

<大槌臨海研究センターのこと>

1988年根本所長に呼ばれ、大槌に行かないかとの話があり、生物生理の平野哲也先生がいろいろ助言を下さり就任した。当時大槌センターの公募共同利用は年間1000人・日を割ることが多く当時はやりの「見直し」をやられると定員削減もやむをえないとのこと、「死ぬ気でやってくれ。」と所長に言われ就任した。まず共同利用の予算の増額の見込みもないことを考え、公募外共同利用の規定を作り、運営委員会で認めてもらい受け入れの機会を増やした。ヨーロッパの臨海研究所などに比べ、来所者に成熟したフィールドを提供するという精神が大槌センターに全く欠如していることをそれまでの利用経験から痛感していたので、その辺から改革を始めた。1990年2月より毎月湾内の5つの横断測線上の27点で海洋観測を行い、T、S、栄養塩、クロロフィルの鉛直分布を測定し、分布図を作成し、大槌湾をフィールドとする利用者に提供すべく、ニュースレターを発行し情報を流した。1年3ヶ月続けた海洋観測では、新任の盛田孝一船長、助手

の飯泉仁、竹内一郎氏の貢献が絶大であった。これと併行して、大槌湾の一次生産構造の研究を古谷研先生のグループにやってもらい、大槌湾のフィールドを成熟させることに努めた。センター報告には、大槌湾周辺の動・植物相の記載やフィールドガイドを出筆してもらうよう頼んだ。亡くなった土田英治君が第1号で大変立派な貝類の記載を出筆してくれ、感謝している。活動が活発になるにつれ、センターとして漁業権をもつ海面が欲しいと思うようになり、大槌漁協の田中組合長、佐藤現参事さんが大変な理解を示してくださり、防波堤の沖合側にセンターの漁業権が設定された。このときは、事務主任の武井和夫氏が大奮闘された。また将来気象観測装置をなるべく湾奥に近いところに設置する構想で、航路に接するように漁業権設定をした。大槌では、砂浜域生態系が面白く、高橋一生と廣瀬太郎という優秀な院生と楽しいフィールドワークが出来た。盛田船長もこの2人をかわいがって、よくしごいた。

<プランクトン部門>

根本先生が癌に倒れ御本人には知らされなかったが、見舞いに行ったところ「君にはいろいろキツイことを

言ったが、体を大事にしろ。」とベッドの上で言われた瞬間、「もう、イカン。」と私は思った。3ヶ月後の1990年8月に先生が亡くなられ、約1年後に私が後任として戻った。スケール大きく活躍されていた根本先生のあとで、どうなることやらと思ったが、とにかく部門の雰囲気は松江先生の頃とはだいぶ異なっていたので、とりあえず松江研究室の再現を目指し、部屋替えから始め、次第に復元した。「データをどう取ったらいいかの相談にはのりません。何か書いて来たら相談にのり、直します。」というのが松江流であった。テーマは、1960年代にやったハダカイワシ類とし、学生の就職のことも考慮して生物海洋学的及び水産海洋学的思考方法を身に付けさせるべく5人の大学院生とともにフィールド研究を楽しんだ。冷戦構造の崩壊によりアメリカの深海生物研究を推進してきた海軍(ONR)の金が途絶え、中・深層魚の研究が、私が離れている15年間ほとんど進展がなかったことは私に幸いした。停年後1年はこれらの学生達の約10編に上る論文の印刷のお手伝いをするつもりだが、これで日本近海は世界でハダカイワシ科魚類のことが最もよく解っている海域となるだろう。



N.B.Marshall, B.Stevens, 筆者



尼岡, E.Bertelsen, 筆者, P.Castle, 沖山

(1983年8月15-18日, E.H.Ahlstrom memorial symposium, 'Ontogeny and Systematics of Fishes', La Jolla, Califにて)

●退官にあたって

私と海洋研究所

白鳳丸船長 田 中 裕

東京大学海洋研究所設立後2年目の昭和40年4月、海洋研究所に入所し、当時としては海洋研究のさきがけとなった初代淡青丸、日本一の海洋研究船初代白鳳丸、そしてハイテク船の現淡青丸、現白鳳丸に乗船し、36年の長い間、日本のみならず世界の海洋学発展のために、縁の下の力持として、又船乗りとして貢献することができましたことは、光栄の至りであり、私の喜びとするところです。海洋観測を通して旧淡青丸では、一般の船では立ち入ることのできない日本沿岸各地を巡り、白鳳丸では、南北太平洋、インド洋を航海し、南は南極海の南緯66度の氷海まで、北はベーリング海の北緯62度まで達することができました。

そして、平成元年に竣工した現白鳳丸では、世界一周研究航海に従事する機会に恵まれて、喜望峰とホーン岬

を巡る航海ではなかったものの、太平洋―パナマ運河―大西洋―地中海―スエズ運河―インド洋と、地球を一周し、世界に名を馳せた航海者達の末端に、名を連ねることができるのではないかと密かに夢見ております。

20世紀から21世紀に亘った現役最後の航海は、海賊の多発するマラッカ海峡を通過し、アデン湾、ベンガル湾での観測でしたが、無事に終了してみれば、心に残る印象深いものでした。

淡青丸での2年9ヶ月間、白鳳丸での4年間、船長として大役を全うできたのは、関係者皆様のご理解とご協力のお陰であると感じ申し上げますと共に、これからの海洋学と東京大学海洋研究所の発展を心からお祈りしている次第です。



わが国のNEAR-GOOS関連の研究計画 「緑辺海の時況予報のための海洋環境モニタリングの研究」について

海洋物理学部門海洋大循環助教授 川 辺 正 樹

1. はじめに

国際研究計画世界海洋観測システムGOOSの地域活動の一つとして、GOOS北東アジア地域計画NEAR-GOOSが進められている。NEAR-GOOSには日本・中国・韓国・ロシアが参加し、海洋観測データのリアルタイム収集のための国際的な枠組みとインターネット・システムの構築を目指した活動が行われており、それを支える我が国の研究活動が、ここで紹介する研究計画「緑辺海の時況予報のための海洋環境モニタリングの研究」（略称「緑辺海の時況予報」）である。

本研究計画は、文部省特別事業費「海洋観測国際協同研究計画(GOOS)」(平成5～9年度)の後を受けて、平成10年度に特別事業費「緑辺海観測国際協同研究計画(NEAR-GOOS)」としてスタートし、平成11年度から文部省科学研究費特定領域研究Bとなり、平成14年度まで続けられる。

2. 背景としての国際研究計画

a. 世界海洋観測システムGOOS

GOOSは、世界の海洋変動をリアルタイムで捉えるための観測システムの構築を目指す国際研究計画である。気候・海洋生物資源・沿岸・海の健康・海洋サービスの5つのモジュールで構成され、海洋サービスを除く4つについてパネル委員会を作って活動している。GOOSの

構想は1990年の第2回世界気候会議で取り上げられ、1992年の環境と開発に関する国連会議UNCEDでユネスコ政府間海洋学委員会IOCの主導で推進することが決められた。その後、IOC、世界気象機関、国連環境計画を母体とするGOOS政府間委員会I-GOOSが作られ、1993年2月にI-GOOSとIOC執行理事会で行動計画が決められ、実行段階に入っている。

b. GOOS北東アジア地域計画NEAR-GOOS

GOOSでは多くの地域活動が行われているが、NEAR-GOOSはEuro-GOOSとともに最も早く立ち上げられた地域計画である。IOCの西太平洋地域小委員会WESTPACの事業として、日本・中国・韓国・ロシアの4カ国によって推進されている。日本海・黄海・東シナ海の観測データをリアルタイムで収集し、お互いに利用し合い、データの国際交換による成果をあげ、GOOSの推進に貢献している。

当面の課題は、対象海域の既存の観測データを交換することであり、平成8年からリアルタイムおよび遅延モードのデータ交換を目的としたNEAR-GOOSデータベースが運用されている(図1)。

地域リアルタイムデータベース(気象庁, <http://GOOS.kishou.go.jp>)には、全球気象通信網(GTS)を通じて通報される海洋・海上気象データ(水温、塩分、海

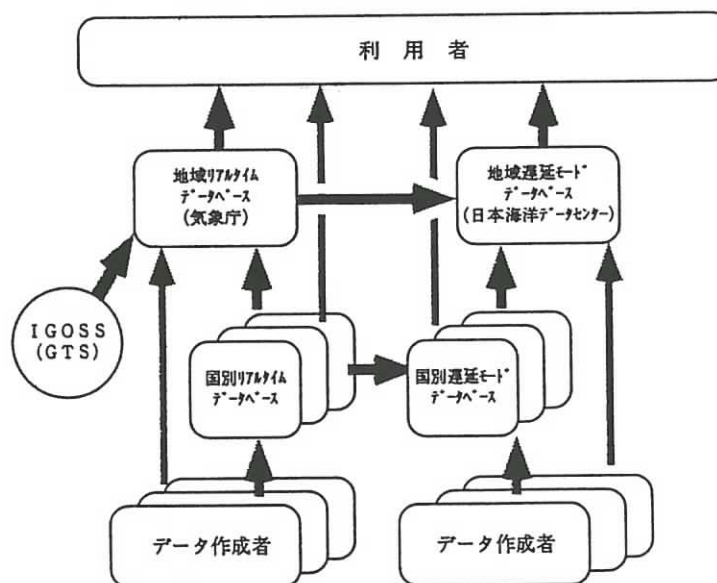


図1. NEAR-GOOSにおけるデータ交換システムのデータの流れ(長谷川直之, 2000)。

流、風、波浪等)や関係機関がホームページに公開している観測データ、及び電子メールやftpで提供される観測データが集められ、30日間保管される。その後、データは地域遅延モードデータベース日本海洋データセンター、<http://NEARGOOS.jodc.jhd.go.jp>に転送され、独自に集められた遅延モードデータとともに管理され、NEAR-GOOSデータ利用者に提供される。日本以外の参加国には、その国のデータ提供機関からのデータを収集・管理する国別データベースが開設されている。

気象庁をはじめとする関係機関によって、NEAR-GOOSデータを利用したプロダクトの提供も始められている。今後は、物理学的な要素に加え、化学・生物学的なデータ・プロダクトも交換されるようになる。

(この項は、長谷川直之(2000):NEAR-GOOSにおける国際海洋データ交換について、「緑辺海の家況予報」中間報告書(I), 19-20.に基づく。)

3. 研究計画「緑辺海の家況予報」の概要

a. 研究目標

海洋は地球環境の形成と変動に大きな役割を果たしており、海洋生物資源の変動は人類の将来を左右する。しかし、海洋諸過程の解明は遅れ、海洋現象の予報はまだ実現していない。海洋観測の頻度の比較的高い日本海・黄海・東シナ海で海洋予報のためのリアルタイム・モニタリングを確立し、国際共同事業で収集する水温・塩分・海流・化学物質・生物量などの海洋の現況データをもとに数値モデルによる海況予報を試行し、海洋過程の理解を深めることが重要になった。船舶による海上気象観測の多い緑辺海については気象予報は比較的高精度で行われているので、海洋についても現況が把握できれば、それらを境界条件や初期値とした数値モデルで予報が可能となるであろう。

本研究では、NEAR-GOOSデータを活用して、日本海・黄海・東シナ海の水温・塩分・海流・栄養塩・化学物質・海洋生物資源・資源環境及び海洋基礎生産のモニタリング法を確立し、緑辺海循環モデルによる海流・水温・塩分の予報と化学物質や生物資源等の拡散輸送の評価に基づく海況予報を実現するために、海洋の物理・化学・生物の共同研究を実施する。海洋過程の理解を深めるとともに、人類の海洋活動を支援し海洋利用の促進に寄与することが期待される。

b. 組織

本研究計画は8つの研究課題をもち、総括班と8つの計画研究班から成る。研究課題と研究代表者、研究内容の概略は以下の通りである。

総括班 緑辺海の家況予報のための海洋環境モニタリングの研究(平啓介, 東大海洋研)

研究成果シンポジウムの開催や報告書の作成を進め、白鳳丸航海の企画や研究に必要な高額機器の購入など研究班間の連携と研究計画の円滑な推進を図り、研究成果

や進展具合を評価する。

課題1 東シナ海・日本海の家流モニタリングの研究(平啓介, 東大海洋研)

東シナ海や日本海に流入する黒潮の流量を海底ケーブルを用いてリアルタイムで観測する。NEAR-GOOSデータベースに通報するために、地電位差伝送システムを整備し、地電位差計測との比較・較正のために研究船や練習船による音響ドップラー流速プロファイラーADCPの航走観測と係留流速観測を実施する。

課題2 潮位変動等による海流モニタリングの研究(川辺正樹, 東大海洋研)

潮位データを用いて黒潮の流量と流路をモニターし、鹿児島・沖縄間を航行する定期フェリーの船底設置で上層の流量を測定する。これらのデータを準リアルタイムで収集し、黒潮の流路・流速・流量の変化をインターネットで公開するシステムを作成する。

課題3 東シナ海の家況モニタリングの研究(市川洋, 鹿大水産)

練習船や研究船での観測により、東シナ海の水温・塩分・海流・栄養塩・プランクトン量などの海況要素の変動特性を明らかにする。特に30日程度の海況変動と潮汐流、海上風応力、海洋前線の位置と強度との関係を解明する。

課題4 海洋生物資源と環境のモニタリングの研究(寺崎誠, 東大海洋研)

日本海を主対象として、動物プランクトンやマイクロネクトンの水平・鉛直分布構造と季節・経年変動、カイアシ類など重要種の個体群変動、基礎生産環境の動態を、研究船や練習船、定期フェリーによる観測で明らかにし、モニタリングの手法を確立する。

課題5 緑辺海の家況予報モデルの開発の基礎研究(山形俊男, 東大院理学系)

NEAR-GOOS海域の家況予報モデルを開発し、数ヶ月程度までの表層海況予報を試みる。緑辺海の長期海況を支配する中・深層水の形成過程を解明する。緑辺海に特徴的な海洋フロント、中規模渦、鉛直混合を再現し予報するための海洋データ同化手法を開発する。

課題6 緑辺海の家境変化に関わる化学物質のモニタリングの基礎研究(渡辺修一, 北大院地球環境)

日本海の物質循環の測定に基づいて、環境変化をモニターする手法を確立する。大陸起源と生物生産による物質と沈降粒子等の量的・組成的变化を測定し、定点を設定して研究船や練習船による採水分析と係留セジメントトラップによるサンプリングを行う。

課題7 緑辺海の家基礎生産のモニタリングの基礎研究(古谷研, 東大院農学生命)

衛星海色データから海洋基礎生産を評価し、月間海況図を作成する。衛星データの比較・較正のために現場での測定を行い、データ較正のアルゴリズムを開発する。係留ブイ観測による時系列データの取得により、緑辺家の基礎生産をモニターする技術を開発する。

課題 8 人工衛星による緑辺海と黒潮変動のモニタリングの研究 (川村宏, 東北大院理学)

定期フェリーに搭載した測器による航走観測と衛星データから評価される物理量を用いて、黒潮周辺海域の海洋変動をモニターするシステムを開発する。航走観測では、船底設置 ADCP, 甲板上の気象測器, 投下型センサーで流速, 海上気象, 水温・塩分を測定する。

本研究計画で扱うテーマとパラメータ, 研究班の連携を示すと図 2 のようになる。海況モニタリングをベースにし, 数値モデルを介して海況予報を行うという方針であり, 図 2 のうち海洋生態系モデルの開発とそれを用いた予報の研究を除く部分が, 本研究計画の研究対象である。海洋生態系モデルは, 海水循環モデルの進展の上に次の段階で取り上げるべきものである。

c. データ等の公表

データやプロダクトの一部は, ホームページで公開されている。

研究課題 1 では, 対馬一壱岐一野北間と鹿児島一奄美大島間の電位差データを

<http://amami.riam.kyushuu.ac.jp/>で,

研究課題 2 では, 潮位データによる黒潮の流路・流速・流量の変動と NEAR-GOOS でデータベースによる日本南方の水温分布のアニメーションを, それぞれ

<http://dpo.ori.utokyo.ac.jp/research/Tide>と

<http://dpo.ori.utokyo.ac.jp/research/Tide/GOOS>

で,

研究課題 8 では, 気象衛星のデータによる日本周辺の毎日の海面水温分布を

<http://noaa.cc.tohoku.ac.jp/>で,

公開している。

毎年11月に東京大学海洋研究所の共同利用研究集会を開催し, 各研究班の研究成果を発表している。このシンポジウムでの講演要旨やその年度の研究内容・成果と次年度の研究計画, その年の関連論文リスト, 及び国内外の関連計画や会合の紹介は, 年度末に中間報告書にまとめられ, 関係機関・研究者に配付されている。本研究計画の詳細については, この中間報告書を参照されたい。

省略用語の説明

ADCP: Acoustic Doppler Current Profiler

GOOS: Global Ocean Observing System

GTS: Global Telecommunication System (of WMO)

IOC: Intergovernmental Oceanographic Commission (of UNESCO)

I-GOOS: Intergovernmental Committee for GOOS

NEAR-GOOS: Northeast Asian Regional GOOS

UNCED: United Nations Conference on Environment and Development (Reode Janeiro, 1992)

UNEP: United Nations Environment Programme

WESTPAC: Sub-Commission for the Western Pacific (of IOC)

WMO: World Meteorological Organization

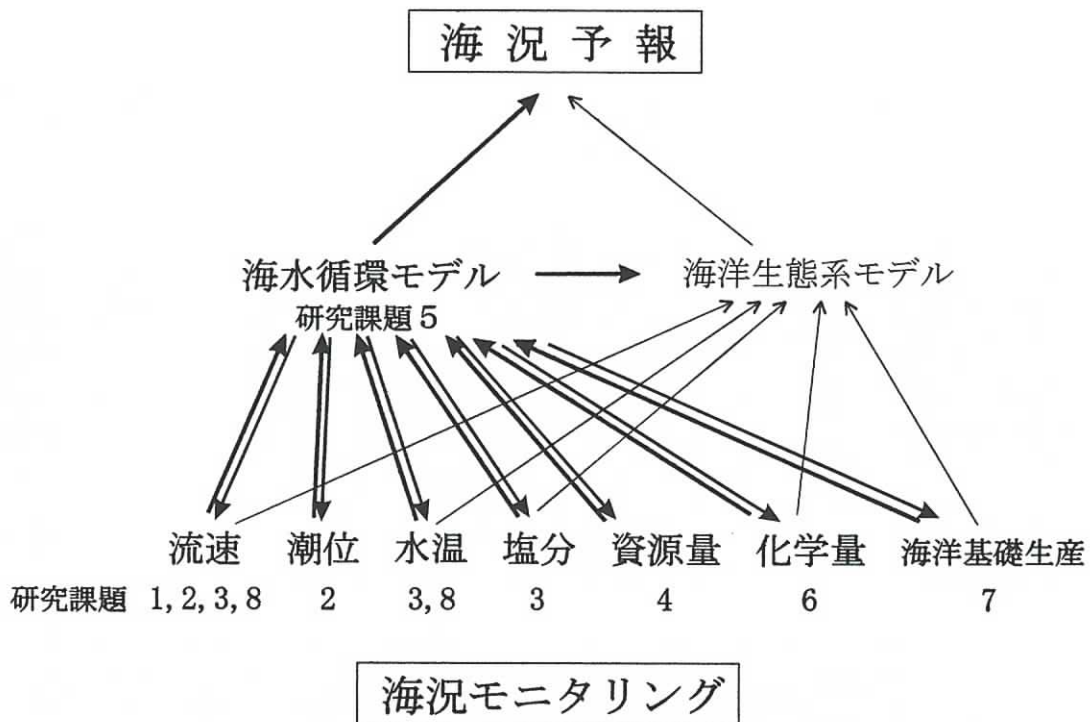


図 2. 研究計画「緑辺海の海況予報」の組織と連携状況。ただし, 本研究では海洋生態系モデルは扱わない。



●海洋科学国際共同研究センター

釜慶大学校と部局間学術交流協定を締結

海洋科学国際共同研究センター教授 寺 崎 誠

海洋研究所は8月23日に釜山のグランドホテル特別室で国立釜慶大学校（大学間）海洋科学研究所と部局間学術協定を締結した。締結式には海洋研究所から平啓介所長、寺崎誠海洋科学国際共同研究センター長、杉本隆成教授、渡邊良朗教授、釜慶大学校からはSung Hoi HUH海洋科学研究所長、Jae Chul LEE教授、Kyu Dae CHO教授（本学出身）が出席した。23日からはグランドホテルを会場に第1回日韓GLOBEC合同シンポジウムが開催されており、締結式はこれに合わせて設定された。釜慶大学校は釜山水産大学校と釜山工科大学校が1996年

に合併して作られた韓国でも有数の総合大学で6学部、68学科と15の研究所があり、教官数は639名、学部学生数は約23,000名、大学院学生数は約3,300名である。前身の釜山水産大学校時代から海洋学・水産学研究の中心で多くの人材を世に送り出している。海洋科学研究所の名称の前に大学間という文字を付したのは、この研究所が釜慶大学校のみならず韓国の他大学に属する大学院学生の教育も行っているからである。研究所の教官数は約20名であるが半数は本学から理学博士・農学博士を取得している。





●海洋科学国際共同研究センター

第11回JSPS海洋科学合同セミナーの開催について

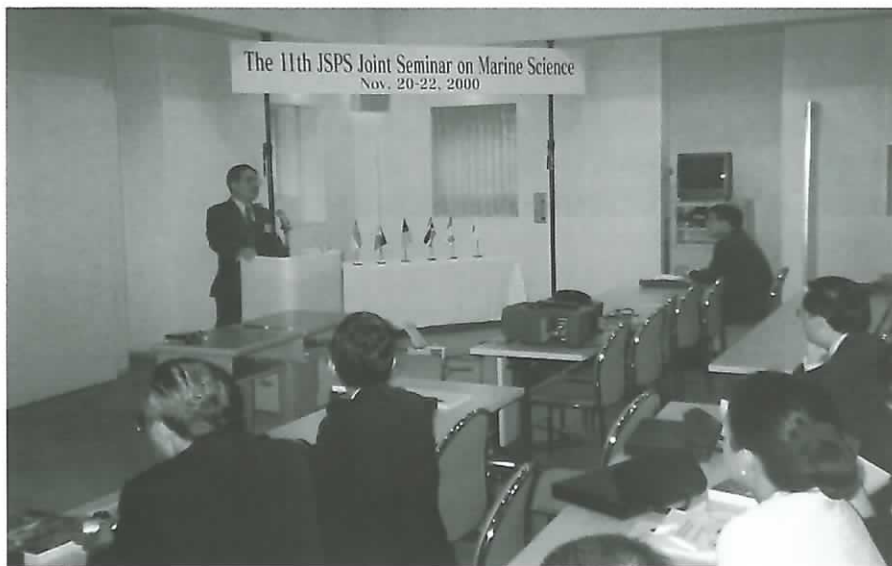
海洋科学国際共同研究センター助教授 金子 豊 二

日本での海洋科学合同セミナーの開催は、1990年、1992年、1996年に続き、4回目を数える。10年以上にわたり開催されてきた合同セミナーは、主に拠点大学方式による共同研究に関連した講演を集め、日本および東南アジア諸国の研究者が相互に意見を交わす場を提供してきた。11回目となる今回のセミナーでは特に、これまでの共同研究の成果を総括するとともに、21世紀における海洋科学の進むべき方向と課題を浮き彫りにすることを目的とした。また、今後の大型共同研究への移行に伴う具体的な問題点、課題等についても合わせて検討を行った。

参加者は日本59名、マレーシア14名、インドネシア12名、タイ6名、フィリピン2名、シンガポール1名、シリア1名と、7カ国95名と盛況であった。セミナー期間

中、海洋生物学、海洋化学、海洋物理などの諸分野に関する39件の口頭発表、22件のポスター発表が参加各国の研究者によって行われ、それぞれの分野における最新の研究成果が紹介された。研究成果に基づき活発な議論が繰り広げられ、東南アジア海域を対象とした海洋科学の重要性があらためて認識されるとともに、東南アジア諸国間の研究協力体制の確立が急務であるとの意見が多く出された。

また、アジア各国から海洋環境の保全と海洋生物資源の持続的利用に関する取り組みが紹介されるとともに、将来の東南アジア諸国における協力体制の確立に向け意見の交換が行われ、まさに21世紀に向けての新たなスタート地点に立ったとの認識が得られた。



●新スタッフ紹介

新 井 崇 臣

大槌臨海研究センター助手

出身は埼玉県

趣味は水泳、スキー、スキューバダイビング

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

研究環境に恵まれた海洋研に職を得ることが出来、大変嬉しく思っています。これまでの経緯を基礎に、新しいテーマにも積極的に取り組んでいきたいと思っています。宜しくお願い致します。

天 川 裕 史

海洋化学部門海洋無機化学分野講師

出身は神奈川県横浜市

趣味は横浜球場に行くこと、世界の様々な音楽を聞くこと、そしてその種のライブに行くこと。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

1月1日付で昇任しました。海洋研に赴任して約8年になりますが、自身の未熟さを痛感させられる毎日です。今後も、皆様から御指導、御鞭撻を賜りたいと思っています。そして、海洋研の発展に尽力する所存です。

河 村 知 彦

海洋生物資源部門資源生態分野助教授

出身は東京都

趣味はスキー、サッカー、バードウォッチング、バードカービング、熱帯魚飼育・水草栽培

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

水産庁東北区水産研究所からまいりました。水産研究所とは少し違った方向から、しかし、これまでどおり楽しく有意義な研究を続けたいと思います。よろしくお願いします。

木 村 伸 吾

海洋生物資源部門環境動態分野助教授

出身は山形県ですが、一歳の誕生日をバングラディッシュで迎えた後、大学入学までは日本を出たり入ったりの流れの民でした。その時に刷り込まれた「青い海と白い砂浜」が私の海洋研究の原点です。

趣味は釣ですが、冬はシーズンオフ、アジ・タコ・アナゴを対象とする安直な釣です。私のような根性無しな釣人にはもってこいの東京湾をサンプリングエリアとしています。でも十分に楽しめる海域です。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

自然界における普遍の原則を探求するとの信念の元に、研究活動を通して、不思議な世界への水先案内人を心掛け、人々に夢と希望を与える魅力ある海洋学の理解を広めていきたいと考えています。

佐 野 有 司

海洋環境研究センター教授

出身は東京都墨田区、川向こうの下町で生まれ育ちました。

趣味は若いころ、夏はサーフィン冬はスキーという生活でした。球技はまったくだめでした。今はありきたりですが、読書と音楽鑑賞です。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

広島大学理学部から転任してきました。その前は本郷の理学部におりました。最先端の装置を使った分析化学と地球化学を基礎に、化学元素をトレーサーとして、地球温暖化、食糧問題、海洋汚染をはじめとする今後100年ぐらいの間に起こる地球環境問題の解決に役立つ海洋の研究をしたいと思います。

千 葉 正

事務部総務課長

出身は福島県

趣味は登山(生き甲斐)、テニス、水泳、オーディオ、写真

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

岩手県一関高専から異動してきました。3年半ぶりの東京大学勤務ですが、これまで徒歩で3分の通勤時間が電車・バスを使っただけの1時間30分に増大し、平日の「課外活動」はほとんどできなくなりました。改めて時間は貴重だと実感しています。

在任中に移転が実現できることを願い、職場に精励して行きたいと思います。

東京大学海洋研究所

〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1

Tel: 03-5351-6342

Fax: 03-3575-6716

ホームページ: <http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/>